「プラヌラ」

髙石紗和子

【舞台】

場に登場する物の全てを実物として舞台にセットする必要はない。
多くの場面において空間は音響・照明等によって表現され、
実際の舞台空間は抽象的なものであることが望ましい。

【登場人物】

まひろ　女　不登校の高校三年生。
はんな　女　まひろの姉。大学四年生。
らこ　女　まひろの同級生。
ゆり　女　まひろの同級生。
もじみ　男　まひろの同級生。
うめ　女　まひろの同級生。
けい　男　まひろの幼馴染。
こうすけ　男　はんなのバイト仲間。
オザキ　男　心療内科の先生。
サナ　女　心療内科の受付。

0

夜が過ぎて、朝はまだ遠い。五月末の午前三時頃。
誰もいないリビング。まひろは無気力にフローリングに横たわっている。
眠ることができずに、本を読んだり、漫画を読んだり、音楽を聴いたりしている。
今日の世界がまだ動き出していない、静かな時間。
まひろはそこにぽつんと投げ出されている。
やがて、窓から真っ白な朝陽が射し込み、
幽かに車や電車の走る音が聞えてくるようになると、
まひろはどこからか毛布を持って来てそれに包まる。
まひろは一つの布の塊になって、舞台の奥で眠る。
溶暗。

1

ジジジ……というトースターの音だけが響く暗闇の舞台。
溶明。薄明りの中、はんなが椅子に座っている。

はんな　あれ、ど忘れだ。今から、何を言うつもりだったか、何を話せばいいんだったか、すこん、と頭の中がまっさらになってしまって、一つも思い出せないなあ、思い出せる気配すらないなあ、やばいなあ、とわたしは思っていて、

声　では、次に、

はんな　待って、

声　では、次に、
はんな　待ってください、
声　では、次に、
はんな　たんま、
声　では、次に、志望動機を教えてください。
はんな　と、無慈悲にも選考は始まってしまった。
声　水倉さんが、この業界を志望されている理由は？
はんな　やばいやばいやばいやばい、
声　あ、水倉さんは、喫茶店でアルバイトをされているんですね。
はんな　あ、あ、そうだ！　それそれ！　そう、わたしは喫茶店でアルバイトをしていて、今までもコーヒーは好きだったけど、その仕事をきっかけにコーヒーの魅力と奥深さを更に実感するようになって、御社のコーヒーに的を絞った経営方針、まさに「コーヒーの・コーヒーによる・コーヒーのための企業」といった姿勢に感動して、
声　あのう、
はんな　それで、そうそう、一人でも多くの人に「おいしさ」という喜びを提供したいと考えていて、あと、御社の姿勢、「お客様第一主義」にも大変、感銘を受け、
声　あのう、水倉さん、
はんな　はい。
声　あのう、会社、間違えていませんか。
はんな　え？
声　大変申し上げにくいのですが、当社の主力製品は、紅茶、なのですが……
はんな　やばい、
声　大変申し上げにくいのですが、紅茶、なのですが……
はんな　悪夢だ！

チーン、というトーストの焼ける音と同時に、舞台全体が明るくなる。
午前七時、はんなとまひろの家のリビング。
テレビがついている。天気予報が小さめの音量で流れている。
部屋の隅に空っぽの水槽がある。
はんなはトーストにジャムを塗って、食べる。

はんな　最低な、夢だった。この間の面接、割とうまく話せたと思うけどなあ、現実では。
声　……全国の天気を見ていきます。こちらです。本日、五月三十日、月曜日の天気です。全国的に今日も晴れるところが多くなります。今朝の気温の様子を見ていきますと、西日本では既に二十度近いところが目立ちます。東日本も、日中はぐんと気温が上がっていきそうです。午後二時の予想気温ですが、黄色やオレンジの表示、二十五度前後のところが多くなるんですね。ただ、夜にかけては関東で南部の沿岸から、天気が崩れ、雨が降り出す予想になっています。お帰りの遅くなる方は、折り畳み傘をお忘れなく……

はんなが朝食を食べ終えて、リモコンでテレビのニュースを消す。

はんな　朝ごはんのトーストを食べ終えて、漫然と流し続けていたテレビを消した。妙にセクシーな調子で今日の天気を読み上げてくる、チーク濃い目、他にも色々と濃い目のお天気お姉さんが消え去り、リビングに静寂が戻ってくる、月曜日の午前七時。妹は、毛布に包まっている。妹は、一つの布の塊と化している。

まひろがもぞもぞと起き出して、窓の外を見る。

まひろ　六時間遅れでやってきた眠気に苛まれ、猛烈に眠たい、午前七時。今朝もまた、太陽が黄色い朝だ。

同時刻、うめは通学中で、

うめ　午前七時、わたしは家を出て、バス停に向けて歩き出している。朝の光が眩しい。春も、もう終わりかなあ。

うめの歩行は少しぎこちなく見える。

同時刻、リビング。はんながまひろに声をかける。

はんな　まひろ。朝ごはん、食べる？　トースト焼こうか？

まひろ　いい。巣ごもり中。

はんな　あ、そ。じゃ、流しんとこに置いとくから。

はんながキッチンに食パンの袋を置きに行くために一度退場する。

同時刻、うめは歩いている。自転車のベルの音。

うめ　自転車に乗った少年が、わたしを追い越した。天気、いいなあ、本当。

同時刻、リビング。はんなが鞄を持って部屋に戻ってくる。

まひろ　大学？

はんな　いや、今日はバイト。帰り遅くなるかも。

まひろ　たいへんだね。がんばって。

はんな　……どうもね。あ、まひろ、今日、オザキさんの日でしょ。寝過ごさないようにね。

まひろ　うん。

空っぽの水槽がはんなの視界に入る。

はんな　ねえ。クラゲ、また飼おうか。

まひろ　……いいよ。育てるの難しいし、長生きしないから。

はんな　そっか。

同時刻、うめは歩き続けている。

うめ　自転車に乗った少年はわたしを追い越して、遠くの方で信号待ちをしている。追いつけるかなあ。あ、だめだ、もう、信号変わった。早……。

同時刻、はんなが家を出ようとしている。

はんな　そろそろ行くね。

まひろ　ん、おみおくりする。鍵、かける、ます。

はんな　ありがと。――じゃ、行ってきます。

まひろ　いってらっしゃい。

姉を見送り、まひろはテレビをつける。何度かチャンネルを変える。

再放送の旅番組が流れ始める。

声　日本からたった四時間半で行くことができる南の楽園、パラオ。今回ご紹介するのは、その南西部にある島、マカラカル島の東部にある、ジェリーフィッシュレイクと呼ばれる湖。ジェリーフィッシュレイクという名前は、その名の通り、『クラゲの湖』を意味します。此処では、数百万匹ものクラゲが湖を周期的に回遊し、一年中、のんびり群れて泳いでいるのです。その珍しい光景を眺めるために、世界中のダイバーが、この湖に集まってきます……

同時刻、うめ。

うめ　春も、もう、終わりかなあ。ちょっと、暑いくらいだ。バス停まで、あと、五〇メートル。五〇メートルというのは、学校のプールの縦の長さと同じである。

うめが歩き去って行く。

まひろがテレビを消して、リビングを去る。

2

午前八時、高校の教室。

らこ　おはよー、って言いながら教室のドアを開けた、午前八時。ホームルームの開始時刻は、八時二十五分だから、まだ結構余裕がありますなあ。五月末の教室には、柔らかい陽射しが漂っている。

もじみが登場。片足に上履きを、もう片方の足にスリッパを履いている。

らこ　あれ、なんでスリッパ？　しかも片っぽだけ。

もじみ　あー、実はさっき、トイレに上履き、片方、落としちゃったのよねん。

らこ　え？

もじみ　だから、トイレに上履き落っことしちゃったんだって。

らこ　え、そんなこと、起こり得ますか？

もじみ　それがねぇ……あー、まず俺ウンコだったわけよぉ。

けい　アホ。

もじみ　はい、アホです。そんでぇ、洋式じゃなくて、和式だったわけよぉ。ていうか男子トイレって和式トイレ率、高過ぎでない？　これって男女差別？　まあ、いいんだけど。で、ね、いやあ、すごかったですよッ。俺が落とした上履きが、和式便所の中に、こう、笹船みたいな、ぷかーって感じで、最早、ちょっと、情緒あったからね。

けい　ねーよ。つか、いつも上履き、踵踏んで履いてっから、そんなことになるんだよ。お前、ローファーも踵踏んでるよなあ。かっこつけてんの？　馬鹿なの？

らこ　え、それで、その上履きはどうしたの。放置？

もじみ　いや、まあ、捨てたよ。

らこ　え、捨てたってことは回収したってことだよね。どうやって？

もじみ　それは、まあ、手で掴んで、回収するしかないっしょ。

らことゆりが教室のカーテンに逃げ込み、バリアを作る。

もじみ　ちょっとちょっと。

らこ　ぎゃーーー！　近付かないで！　不潔ー！

もじみ　え、ちゃんと手、洗いましたよ？　てか、ゆりまでさぁ。

ゆり　ごめん無理。ごめん無理。

もじみ　ちょっとー。ていうか君たち、高三にもなって、そんな、教室のカーテンに包まったりなんかして、恥かしくないの？

らこ　もじみ、悪いけど二日間くらい、わたしに触らないで……

もじみがふざけてカーテン越しに二人に触ろうとして、手を伸ばす。

らこ　ぎゃーーーッ！

ゆり　きゃ〜！　やめて〜〜〜！

もじみ　あーもーなんだよー。けい、これイジメじゃね〜〜？

けいが両腕をクロスさせてバリアを張る。

もじみ　ブルータス……ッ！　あー、ハイハイ、もういいよ……。君たちにはもう何も期待しないよ……。友情ってこんなもんですよね。

らこ　あー、ごめんごめん、ごめんてっ。うちら、ちゃんと、もじみのこと、友だちだと思ってるから！

もじみ　安全圏から言われてもって感じスわ。

ゆり　もっかい、もじみ、もう一回だけ、手、洗ってきて。そしたらいつも通りに接することができる気がする。
もじみ　やってらんねー。
らこ　てゆーか暑い……。
ゆり　あつーい。

口ぐちに言いながら、らことゆりはカーテンから離れ、戻ってくる。

もじみ　そらそうでしょ。そんな窓際で、直射日光を浴びてたら、さ。もう、五月も末だよ。
けい　最近、あったかくなってきたなあ。
ゆり　そろそろプール開きかもね。
らこ　あー、だねー。でも、うちらには関係ないでしょ。高三はプールないからねー。
ゆり　だねー。

友人たちと会話しながら、らこは考えている。

らこ　そう、高三は、プールの授業がない。だから、うめがプールの遠くにいられるから、なんか安心だなあ。

会話は自然に元の流れに戻って、

ゆり　だよねー。
けい　うちの学校、女子はプール更衣室あんのに、男子の更衣室は用意されてなくて、全員、プールサイドで着替えなきゃいけないじゃん。あれ、マジ、狂ってたよな。
もじみ　あーそれねー。近隣の方々の目がね。

間。

もじみ　実はぁ、俺、上履き捨ててないんだ、よねぇ〜。
けい　は？
もじみ　いや、だってさあ、トイレに落とした上履き、クラスのゴミ箱に入れるわけにもいかないじゃん？　だからとりあえず、トイレの近くの非常階段に置いてきたんだよねぇ、上履き。
らこ　アハッまじか！　え、見たい見たい。
ゆり　もうすぐホームルーム始まるんじゃない？
らこ　だいじょぶっしょ。あと五分以上あるし。
けい　そんなん見てもしょうがないだろ。きたねーし。
らこ　いいじゃんいいじゃん。

四人が教室を出ていく。同時刻、うめはやっと高校に到着している。

うめ　やっと高校に着いた、午前八時過ぎ。なんだか、今日は階段を上りたい気分だけど、階段上ってるとこ、誰かに見られると、気を遣わせるかもしれないからなあ、って思って、わたしは、遠回りになるけど非常階段を上って行く。ここなら、誰にも見られずに済むからね。それにしても、今日は、本当、天気がいいなあ。もうすぐ六月なのに、雨とか、降りそうにないなあ。なんか、変な感じ。

階段を上りきったうめは、置き去られたもじみの上履きを発見する。

うめ　何これ。

四人が非常階段にやってくる。

らこ　あ、うめ。おはよ。
うめ　らこ。おはよ。
らこ　え、階段で来たの？　大丈夫？
うめ　全然平気だよ。もう半年以上経つし。足底板（そくていばん）つくってからは、歩くのもかなり楽になったからさ。

らこ　そうなんだ。うん、よかったね。
うめ　うん。で、何、これ？
けい　それもじみの。多分ウンコまみれ。
うめ　（のけぞって）げっ。
もじみ　やっぱこれ移動させた方がいいかなあ。
けい　まあ、名前ばっちり書いてあるしな。犯人、一目瞭然。
もじみ　よし。
　もじみが上履きを素手で拾い上げ、
らこ　うわぁ、触ったぁ。
もじみ　一回触っちゃえば、ウンコごとき、恐るるに足らず。
ゆり　それ捨ててきたら、もっかいちゃんと手、洗ってね？
もじみ　そりゃ洗いますよ！　ゆり、俺のこと何だと思ってんの？
ゆり　エヘ。ごめんごめん。
　ふと、うめが空を見上げて、
うめ　今日、天気、いいよねえ。
らこ　もうすぐ六月なのにねえ。梅雨とか、何スかそれ、って感じ。
ゆり　ねー。晴れ過ぎだよねー。
　うめは雲一つない晴天を眺めながら考えている。
うめ　そう、今日の空は、晴れ過ぎている。わたしたちの毎日は、晴れ晴れとし過ぎている、気がする。雲一つない青空が気持ちいいというのは、情報の少なさによる、気持ちよさらしい。きっと、わたしたちは、毎日、何かを見て見ぬふりしていて。気付かないふりを、知らないふりをしていて。それは一体、何を、見て見ぬふりして、こうして晴れ晴れと過ごしているんだろう。なんか、しっくりこないよね……。
ゆり　ねー。晴れ過ぎだよねー。
もじみ　あー、早く、夏来ねーかな。
らこ　え、夏好きー？
もじみ　あー、好きかっていうと微妙かなあ……。圧倒的に楽じゃん、春とか秋の方が。
ゆり　あ、だねー、楽だよねー。
うめ　夏嫌いだな、汗かくし。
らこ　汗っかき？
うめ　いやあ、どうだろ……。
らこ　ゆりは超汗っかきなんだよ。ね。
ゆり　え～、ちょっとやめてよ～。
もじみ　もう六月になるのかー。早いよな。
うめ　ねー。
けい　受験本番近づいてきたよな。
らこ　ねー、やだねー。
もじみ　まひろ、学校来ないな。
うめ　……うん。
らこ　もう半年くらいかなあ。
ゆり　だよね。

らこ　けいさ、何か聞いてる？　幼馴染でしょ。
けい　いや……何も。
　チャイムが鳴る。
らこ　あっやばっ。
もじみ　あー、俺ゴミ捨て場行ってくるから、先生に言っといて。
けい　リョーカイ。
うめ　やば、集団遅刻だわ。
ゆり　急ご急ご。
らこ　一時間目英語だっけ。
けい　うん。宿題やった？
らこ　え、何かあったっけ……
　など、アドリブ気味に色々と喋りながら、高校生たちは去って行く。

3

　喫茶店。こうすけが鼻歌を歌いながら事務所に入ってきて、
　その場で上の服を脱いで着替え始める。暫くしてはんなが登場し、
はんな　うわっ。……ちょっと、更衣室あんだから、そっちで着替えてよ。
こうすけ　えー、いいよ別に。
はんな　いや、いいよじゃなくてさ、こっちが見たくないんだって。
こうすけ　だってこの店、更衣室一個しかないじゃん。効率悪くね？　どうせシャツ着てエプロン付けるだけだしさ。
はんな　あのさあ……。
こうすけ　は？
はんな　いや別に。いいよ、何でもないから。
　はんなが事務所の奥の更衣室に入る。こうすけは鼻歌を歌っている。
　こうすけは事務所の椅子に座り、バインダーに挟まれたシフト表を確認している。
こうすけ　はんなー、店長まだ六月のシフト出してねーわ。
はんな　着替えてんだから話しかけないでよ。でも、アイツ本当クソだな……。
こうすけ　前の店長の方がマシだったよな。川上。すぐキレたけど。あーでも最後の頃はちょっと優しかったかな。
はんな　あれは結婚したからでしょ。
こうすけ　あー、川上、そういうタイプの女っぽかったよな。結婚＆出産で性格変わる系。ていうかカフェの店長でも
　寿退社とかあんのね、って思ったわ。
はんな　てか、シフト出てないのマジ困る。もう五月終わんじゃん……。わたし、次来るの土曜だし。
こうすけ　え、けっこ空くね。稼げなくね？
はんな　就活中だっつの。
こうすけ　あー、六月から選考開始だっけ？
はんな　まあ一応、そういうことになってるけど、もっと前から始めてるとこもいっぱいあるし。
こうすけ　へー、大変ですね。
はんな　大変だよ。今うち、妹がちょっと不安定だからさ、わたしのことでまで、親に心配かけらんないし、なるべ
　く早く内定欲しいんだわ。
こうすけ　はんなら大丈夫っしょ。俺はめっちゃ不安だわー。

はんな　こうすけ、留年決定してるんだっけ。
こうすけ　そうそう。羨ましいだろ〜ー？　もう一年遊べるどーん。
はんな　ぜんっぜん羨ましくねーわ。――時間過ぎてる？
こうすけが事務所のパソコンの打刻画面を確認して、
こうすけ　過ぎてるー。はんなの分も打刻しとくわ。
はんな　頼むわ。
はんなが着替えを終え、更衣室から出てくる。シフト表を確認して、
はんな　げ。一時からヘルプの人かー。
こうすけ　この店、人足りてなさ過ぎ。川上、教育下手過ぎて、新人全然残んなかったんだよなー。つーか、マジ、体育会系ごじらせててさ、客の前でも平気で怒鳴るし、新人すぐ泣かしてさ、本人は「泣かせてやった」とか誇らしげなワケ。そら辞めるわ、みんな。ヤンキーなんだよな、思考回路が……。
はんな　それね。そのせいでこの店、異様に三、四年率高いし、時責はほぼ四年だけだし、うちら卒業したら、この店どうなんだろ。
こうすけ　俺もはんなたち卒業するときに一緒に辞めようかなー。
はんな　あー、いいんじゃない。
間。
こうすけ　はんなって何系志望なの？　業界とか。
はんな　え？　あー、特に絞ってないよ。ブラックじゃなくて、福利厚生しっかりしてて、一緒に働く人が嫌な感じじゃなければ、まあ、どこでもいいかなって。
こうすけ　じゃ、ここの社員は？
はんな　いや、無理無理。絶対ブラックでしょ。川上、十五連勤とかしてたじゃん。
こうすけ　あー、連勤後半になると、「忙しくなったら呼んで」とか言って、事務所で寝てたよな、あいつ。勤務時間中に。
はんな　川上さー、メイク超濃かったじゃん。でも、あれって全部、朝、電車ん中でやってたらしいよ。時間なくて。
こうすけ　マジで？
はんな　疲れてたんだろうね、キレやすかったのも。わたし、ああいうのだけは絶対、嫌だなあ。こう、擦り減らすみたいに働いてさ、頭ん中、疲れた疲れたしかなくなって、すぐキレたり、下んない感じになって……。でも、その道選んだのは自分だし、自己責任なわけじゃん。だから、就職は本当、適当にしちゃ、駄目だよね。自分のことは自分で、どうにかしなきゃね。
極小さな間を置いて、
こうすけ　え、それは何か、そうなの？
はんな　え、何？
こうすけ　だってはんな、川上の苦労は川上が適当に生きてきたせいだ的なこと言ってるけど、川上がどういう経緯でカフェの店長なってたかってのは分かんないじゃん俺ら。
はんな　は？　いや、そんなつもりないけど。
こうすけ　え、ていうか世の中、自分の力じゃどうにもならんことの方が多いくらいじゃん。本当に自分のこと自分でどうにかできんの？　俺らって。
はんな　何、急に。
こうすけ　つまり、例えば、俺がどうして留年したのかって理由とか経緯も、はんなには実際のとこは分かんないっしょ？

はんな　ハー？　どうせ遊んでたんでしょ。
こうすけ　ま、それはそうなんですけど、ねっ。
はんな　何じゃそら……。
　こうすけが鼻歌を歌い出す。
はんな　機嫌いいじゃん。
こうすけ　彼女できた。
はんな　え、ほんとに？
こうすけ　ほんとほんと。
はんな　大学の子？
こうすけ　いやー。
はんな　え、まさか、この人？
こうすけ　いやそれはない。ナンパ。
はんな　うわぁ、コウスケ、ナンパとかしてんの。ほんとにキモい……。
こうすけ　超〜たまにだよ？　いやー、昨日もその彼女と会ってて……
はんな　あ、時間やばい。行こ。事務所の電気と鍵、お願いね。
こうすけ　ちょっ……聞いてよ。
　はんなとこうすけが事務所を出ていく。
　同時刻、尾崎クリニック。サナは待合室のパキラへの水やりと葉水をしている。
　オザキが登場。
オザキ　サナちゃん、西園寺ゆりあって知ってる？
　サナは振り向かずに水やりを続けながら、
サナ　知らないです。
オザキ　今、セクシー過ぎるお天気お姉さんって話題になっててさ。今朝、試しに僕も天気予報見てみたんだけど、本当にすごいのね、彼女。「（声を真似して）お帰りの遅くなる方は、折り畳み傘をお忘れなく……」
サナ　へー。
オザキ　あ、今日、最初の予約って誰だっけ？
サナ　田中さんです。その次は、水倉さん。
オザキ　あー、田中さんね、うん。今日も話長そう？
サナ　わたしに聞かれても分かんないですよぉ。水倉さんは、相変わらずだんまりですか？
オザキ　うーん。
　サナがやっと振り向いて、
サナ　相手が喋んない時のカウンセリングって、先生、どうしてんですか。
オザキ　僕の最近の趣味の話とか話してるよ。
サナ　西園寺ゆりあの話とか？
オザキ　そうそう。
サナ　え、そんなんで治るんですか。
オザキ　いや、まあ、それは冗談だけど。まずはね、心を開いてもらわなきゃどうにもなんないから。よく聞く話だと思うけど、カウンセリングっていうのは、原則、患者さんが主体的に「治って行く」ものであって、カウンセラーが「治す」ものではないわけよ。僕が「ああすればいい」「こうすればいい」っていう風にアドバイスを押し付けても、問題は解決しないのね。仮に、アドバイスを切っ掛けに良くなることがあったとしても、それを取り入れて活かして

いくのは相手自身の力なわけだし、ね。だから、まず為すべきことは、相手の表面的な反発にとらわれずに、待つ心で接することで……聞いてる？

サナ　大方は。

オザキ　あのねえ……。あ、もしかして反抗期？

サナ　わたしは生れてからずっと反抗期ですよ。

オザキ　それヤバ過ぎでしょ。——ま、つまり、簡単に言えばね、例えば、転んで倒れてしまった人がいたとして、その人が立ち上がるために必要なのは、抱え上げてくれる誰かではなくて、自分自身の二本の脚だ——っていう、そういうことですよ。

サナ　ふーん。あ、そろそろレジ開けますね。にしても、五月病とかよくいうけど、五月はそんなに忙しくなかったですね。

オザキ　忙しくなるのはこれからだよ。「新五月病」とか「六月病」とか言われてるんだけど、新人研修が終わった新社会人達がさ、……

二人が会話しながら去って行く。それぞれの場所で一日が始まって行く。

4

午前九時過ぎ、高校。

もじみ　まひろが高校に来なくなって、半年が経とうとしている。でも、俺たちの毎日は、何も変わらない。朝起きて、学校来て、授業を受けて、夜は眠る。おんなじことの繰り返しだ。俺は、一時間目、英語の授業を終えて、ちょっと眠いなあ、なんて、思っている、午前九時過ぎ。

一時間目が終わり、二時間目が始まるまでの休み時間。

けい　らこ、当てられてたね。

らこ　ついてないよ。宿題やり忘れた日に限って。

うめ　それにしても大過去訳せないのはマズいっしょ。受験生として。

らこ　えー。てか大過去って何？　初耳なんだけど。

うめ　ちょっと、本当、大丈夫なの？　あのね、大過去は、二つの過去の事柄があって、一方が他方より「前」であったことを表す場合の表現で、形は過去完了と同じ had done で……

もじみ　すご、もしかしてうめ、ネクステージ暗記してる？

うめ　暗記って程じゃないけど。二周くらいは解いたから。

ゆり　え、すごーい。わたしまだ一周も解けてないよ。

うめ　部活辞めてから、暇になったからなあ。

ゆり　あ……。

うめ　ま、おかげで志望校のレベル上げれそう。

ゆり　そ……っか。すごいなあ、うめは。わたしも見習わなきゃ。

らこ　あ、てかさ、ゆりさ、この前、何か、王子と話してなかった？

ゆり　あ、うん。……生徒会のことで、ちょっと。

うめ　いーなー、わたしも王子と話したい。癒されたい。

らこ　ね、それ思う。毎日思う。

もじみ　何何、王子って。

けい　管藤だよ、管藤。生徒会長。

もじみ　あー、イケメンね。

らこ　この前、手振ってもらったんですけど。
うめ　え、振ってもらえないんですけど。
らこ　え、何かこの前、何かー、そう、わたしがー、
うめ　あ、聞いたー、それ。
ゆり　聞いたよね。予備校行く時の……、
らこ　そう、そうそうそう。ちょうど、何か、王子も予備校来てて、そしたら、「あ、がんばってー」みたいな感じで、手振ってくれましたーー！
うめ　え、「がんばって」って言ったの？
らこ　言ってくれたの！
うめ　え、メッセージ付き？
らこ　うん！
うめ　まじかそれ、え、王子のコメント付き？
けい　管藤の一言って、そんな価値あんの。
もじみ　そんなに？　需要高過ぎだろ。
らこ　まーまー、モテないからってひがむなって～♡
もじみ　ひがんでねーよ。
うめ　わたしだって金曜さー、王子、ま、会ったけどー、
ゆり　予備校？
うめ　うん、でも「がんばれ」なかった～。
らこ　あ、でもわたしも普段はスルーされてるから。
　ゆりが話題を変えようとして、
ゆり　あ、そういえばらこさ、昨日映画、どうだった？
らこ　あ、うん。面白かったよ、（もじみに向かって）ね。
もじみ　あー、うん。そこそこ。
けい　え、二人で映画行ったの？
らこ　うん。
もじみ　ゆりは昨日どこ行ってたの？
ゆり　え？　ああ、カフェとか、かな。
うめ　え、どゆこと？
らこ　なんか昨日、池袋で待ち合わせしてたらさ、偶然会ったんだよ、ゆりと、駅の、宝くじ売り場の辺りで、本当、偶然、ねー。
ゆり　うん。わたし、人と待ち合わせしてるところで、
らこ　すごいびっくりしたよ。まあ、でも、うちら遊びに行く時、たいてい池袋か新宿か渋谷か吉祥寺か、その辺だからね。被る時は被るよね。
けい　確かに。いつも、その辺に落ち着くよな。俺、去年の夏、吉祥寺行った時、一日で同じ学年のやつ、五人くらいと会ったことあるよ、全部偶然で。
もじみ　へー。
　と、言いながら、けいは思い出していて、
けい　そう、去年の八月、あの日は偶然、うめと、まーちゃんにも、会ったんだったなあ、アトレ吉祥寺で……。

去年の八月のあの日。アトレ吉祥寺。

うめ　あれ、けい？

けい　え、あ、うめ、まひろ。

うめ　偶然～。え、一人？

けい　いや、父さんと来てる。今ちょっとトイレ行ってて……。

まひろ　相変わらず、お父さんと仲いいね。

けい　そうかな。一緒に出かけると、本とか買ってもらえるからさ。

うめ　あー、そういうの、あるよね。

けい　二人は？

まひろ　部活帰り。髪、ちょっと濡れてるでしょ。

うめ　夏休み、殆ど毎日部活だからね、全然休んでないよね。

まひろ　ねー。

けい　大変だな。

うめ　早く引退したいよ。

まひろ　とか言ってる人ほど、引退してから「水が恋しい」とか言い出すんだよ。

うめ　アハハ、そうかも。

まひろ　あ、じゃあそろそろ行くね。お父さんによろしく。

けい　うん。

うめ　「お父さんによろしく」って、なんか結婚してるみたい。

まひろ　幼馴染だからだよ。

うめ　え～。

まひろ　本当、何もないっすよ。

うめ　そうっすか～？

うめとまひろは楽しそうに喋りながら、去って行く。

けいは何となく蚊帳の外で、ぼうっとその後ろ姿を見送っていた。

けい　去年の八月、まーちゃんは、楽し気に笑っていたなあ。その三ヶ月後、うめは……

けいが教室の現在に戻ってくる。

らこ　ゆり、カフェってどこのカフェ行ってたの？

ゆり　西口の方。

らこ　へえー、じゃあうちらとは反対方向だったんだね。

会話がループする――

うめ　え、どゆこと？

らこ　なんか昨日、池袋で待ち合わせしてたらさ、偶然会ったんだよ、ゆりと、駅の、宝くじ売り場の辺りで、

本当、偶然、ねー。

と、言いながら、らこは思い出していて、

らこ　そうそう、昨日の日曜、わたしともじみは池袋で映画の約束をしていて、

昨日の日曜日、池袋駅の改札付近。

らこ　もーじみ。

もじみ　わ、らこー。お前遅刻だぞー。

らこ　えへへ。

もじみ　えへへ、じゃないよ。まったく……。
らこ　ごめんごめん。電車遅れてて。
もじみ　え、遅延？
らこ　いや、電車、に、遅れてて、わたしが。
もじみ　は？
らこ　目覚まし時計の遅延、といいますか、
もじみ　ただの寝坊だろ、それ！
らこ　あはっ。間に合うかな、映画。
もじみ　ま、元々かなり早めの待ち合わせだったし、間に合うっしょ。
らこ　――とかいって、サンシャイン通りに向けて歩きだそうとした時、
もじみ　あれ。あれ、ゆりじゃない。
らこ　と、もじみが言って、見るとそこには確かにゆりが立っていて、池袋東口、宝くじ売り場の辺りに、ゆりは立っていて。

らこがゆりに話しかける。

らこ　ゆり。
ゆり　え……、あ、らこ、もじみ。
もじみ　何してんの？
ゆり　えっと、待ち合わせ。
らこ　もしかしてデート？
ゆり　ちがうよ。
らこ　ほんとに～？
ゆり　本当だって！　てか、そっちこそさぁ。
らこ　え、え～、ちがうよ～！
もじみ　映画観にきただけ。
らこ　うん、そう、映画を観にきただけ、観に、きた、だけなんだあ。……はぁ。いいなあ。楽しんできてね。
ゆり　うん、じゃあまた学校で。
らこ　また明日。
もじみ

らこともじみが去って行く。

ゆり　と言って二人は去って行った。今日、らこともじみも、池袋来てるのかぁ。

こうすけが登場。

こうすけ　お待たせ。
ゆり　遅い～。
こうすけ　ごめんごめん。

こうすけが、自分では「余裕のある年上の彼氏」、と思っている微笑みを浮かべながら、ゆりの頭を撫でる。

ゆり　ごまかそーとしてるでしょ。
こうすけ　バレた？
ゆり　も～！
こうすけ　よしよし。

こうすけがゆりの頭を撫でる。

ゆり　馬鹿。

こうすけ　機嫌なおせって。映画代奢ってやるからさ。

ゆり　あ、んー、映画、映画かぁ……。

こうすけ　え、ゆり、映画観たいって言ってなかったっけ。

ゆり　んー、うん。でも、んー、映画やめない？　西口の方に行ってみたいカフェがあって……。

こうすけ　いいよ。じゃあ、カフェ行って、その後は、カラオケとか行く？

ゆり　この前、行ったばっかじゃん。（笑）　――そう、初めて会った時にも、この人はわたしをカラオケへ連れて行った。わたしはそこで、初めてのキスをした。

数週間前、ゴールデンウィークの新宿駅。

同時進行でこうすけとゆりが喋る。

こうすけ　新宿には、マルイも伊勢丹もアルタもルミネエストもあるし、映画館とかカラオケもいっぱいあるし、歌舞伎町もあるから、色んなタイプの女の子が集まってくるんですよ。俺的にはキャバ系とかお水系は、ちょっと……。OL系とかJD系はイケる感じで、だからナンパする時、歌舞伎町の方までは、あんま行かないです。駅構内でやった方が、キャッチとかにも絡まれなくて済んで、安全だし。コツですか？　あー、ロッカーの前とかで暇そうにスマホ弄ってる子とかは、狙い目ですね。例えば、あーいう感じの……（ゆりに話しかけて）ねえ、君、一人？　待ち合わせ？　――声かけた時、女の子が自分に食いついているかどうかは、もう、態度で分かりますね。ニヤニヤしたり、瞳がキラキラしたりしてる子は、連れ出しやすい。（ゆりに話しかけて）ねえ、もしかして暇してる？　――イケるな、この子。もしかしたら即イケっかな。

ゆり　新宿には、マルイや伊勢丹やアルタやルミネエストしかない。こんなとこ、一人で来ても退屈なだけだ。何の予定もないゴールデンウィークの一日を、丸々受験勉強にあてるのは憂鬱で、何となく新宿に来たけど行くところなんてない、はぁ……。（暇そうにスマホを弄り始める。こうすけに話しかけられて）え、なんですか？　あー、待ち合わせじゃないですよ。――どうでもいい感じの男の人に、話しかけられた。本当、どうでもいい感じだけど、ほんの少し、ほんの少しだけ、管藤くんに似てるなあ。なんて思って、――（こうすけに話しかけられて）なんか、暇っていうか、誰か呼んでみようかなって思ってたとこで。――ああ、本当、ほんのちょっとだけ、似てるなあ。

こうすけ　てか名前なんていうの～？　俺、こうすけっていうんだけど。

ゆり　……ゆりです。

こうすけ　ゆり、ね。ゆりさー、これからどっか行かない？

ゆり　え、んー、場所による。全然お金持ってないんだよね。

こうすけ　いーよいーよ俺、金出すし。ジュース飲めて二人になれるとこ行こ。

ゆり　えー、それカラ館とかじゃないの。（笑）

ゆりはこうすけに連れられて――

カラオケの個室。

ジョイ・サウンドの動画が流れている。

こうすけが自分のピアスを示して、

こうすけ　これさ、穴開いてないんだよ。フェイクだから。

ゆり　え、ほんと？

こうすけ　ほんとほんと。耳たぶ挟んでるだけだから、引っ張れば取れるよ。

ゆり　えー。

ゆりがこうすけのフェイクピアスを軽く引っ張って、

ゆり　取れないよ？
こうすけ　もっと強く引っ張ってみ？　取れたら、コレ、あげるよ。
ゆり　えー、いらないんだけど～。
こうすけ　いらないか～。
　ゆりが力を込めてフェイクピアスを引っ張る。ピアスが取れる。
こうすけ　痛っ。
ゆり　あ、ごめん！
こうすけ　痛～。
ゆり　赤くなっちゃってる。
こうすけ　マジ？　……舐めてくれる？　赤くなってるとこ」。
ゆり　え？
こうすけ　舐めて。
ゆり　……いいよ。
　ゆりがこうすけの耳たぶを舐める。次第に舌の動きが激しくなり、二人は体を密着させながらキスをする。
こうすけ　エロいこと好き？
ゆり　うん。
こうすけ　かわいいね……。
　こうすけがゆりの身体をまさぐる。
ゆり　――三十分前に出会ったばかりの男の人に、体を触られている。わたしはなんだか、ぼーっとしている……。
こうすけ　かわいいね……。
ゆり　至近距離で見ると、人の顔なんて、みんな、同じなんだなあ、なんて、考えている……。
こうすけ　かわいいね……。
　ゆりがこうすけから離れていく。
　こうすけはゆりの座っていた椅子をゆりに見立て、撫で続けている。
こうすけ　かわいいね……。
ゆり　そういえば、
こうすけ　かわいいね……。
ゆり　そういえば、この間……、
こうすけ　あったかい……。
ゆり　そういえば、この間、わたし、管藤くんに、フラれたなぁ。
　回想。高校の廊下での管藤とゆりの会話。こうすけが管藤を演じる。
管藤　中野さん。
ゆり　管藤くん。
管藤　来月の生徒会新聞どうする？　無難に体育祭特集かな。
ゆり　まあ、それがいいんじゃない。
管藤　だよね。うん。ありがとう。
　間。
ゆり　あ、そういえばこの前、友だちが、「王子に手振ってもらえた」って喜んでたよ。
管藤　王子？

ゆり　知らない？　何か管藤くんのこと、みんな、みんなっていうか、もしかしたら、わたしの友だちだけかも知れないんだけど、影で「王子」って呼んでるのね。らことか、うめとか……

管藤　あ、安達さんと白土（しらと）さんか。

ゆり　そうそう。モテモテなんだよ、管藤くん。かっこいいとか、癒されるとか。

管藤　ええー。

ゆり　あは。

管藤　二人とも殆ど話したことないから、ぴんと来ない。

ゆり　そう？　まあ、アイドル的な感じなんじゃない？　ああいう盛り上がり方はさ。でも……、でも、管藤くんとよく話すわたしも、（ごくりと唾を飲み込んで）わたしも……かっこいいと思うけどね、管藤くんのこと。

管藤　え？

ゆり　その、管藤くんのこと、わたしも、かっこいいと思う、から。つまり……その、わたし、管藤くんのことが好きなんだけど。

管藤　え。

ゆり　だから、わたし、前から、管藤くんのことが好きなんだけど……。

管藤　え。

ゆり　だからさ……。

管藤　あ……ごめん。あの、中野さん、ごめん。俺……

ゆり　あ、いや、なんていうか、何か、うっかりっていうか、わたしも、つい、言っちゃっただけだから。気にしないで欲しいっていうか、アハハ、謝んなくていいから……。

管藤　ごめん。

ゆり　謝んなくていいって……。

管藤　ごめん。

ゆり　謝んなくていいよ。――謝んなくて、いい、っつってんだろー！　このクソ王子！

ゆりが握りしめていたフェイクピアスを管藤に投げ付ける。管藤が去って行く。

ゆり　くだらない。きたない。気持ち悪いばっかでわたし、どんどん汚れていくなあ。まひろは、高校に来ないまひろは、こういうくだらないとか汚いとかから、逃れられているんだろうなぁ。……いいなぁ。

ゆりが投げ捨てたフェイクピアスを拾い、去る。

5

午前九時半、尾崎クリニック。

まひろ　午前九時半。わたしは尾崎クリニックに来ている。尾崎クリニックは、家から徒歩十分、駅から徒歩五分のところにある。診療所の看板には、「心療内科、精神科、神経科」と、書いてあって、でも、お母さんもお姉ちゃんも、ここを、「オザキさん」と呼びます。まるで誰か、知り合いの人の家みたいに。待合室の椅子に座って、観葉植物を眺めて、いる。パキラ、かな。わたしはパキラ以外、観葉植物の名前を知らない。観葉植物は、待合室の窓側に、ずらりと並べられている。なんだか、この診療所と外の世界を隔てているみたいだ。診察室からは、前の患者さんの話し声が聞こえてくる……。

診察室で、オザキが女性のカウンセリングを行っている。

オザキ　田中さん、またちょっと、お薬増やしましょうか。デプロメール、75ミリまで増やしてみて、様子見ましょう。念のため、50ミリと25ミリの二種類で処方しておきますので、万が一、吐き気等の症状が出た場合には、

ご自身で調節してください。飲む時に、間違えて、５０ミリと５０ミリとかで飲んじゃわないように……

女性　先生。

オザキ　なんでしょう。

女性　わたしって、いつかはちゃんと治るんですか。

オザキ　田中さん、人間の心の深みは、我々にとっても分からないことが多いんです。問題の根底では、その人を取り巻く環境や、その人の性格、家族関係、友人関係等、様々な要素が複雑に絡み合っていて、ある日突然パッと治ってしまう人もいるし、十年以上、これと付き合っていく人もいる。だから、「ちゃんと」「治る」の見極めは非常に難しいもので……

女性　知ってます。分かってます。でも、社会も日常も仕事も物の考え方も性格も家族も、離れられるようなものじゃないじゃないですか。だから、もし、何が良くなかったのかとか、分かっても、それは、変えられないじゃないですか。そういう中にいるのがわたしで、わたしは、わたしである限り、一生そういう中で生きていかなきゃいけないのに、それって、どうすれば治るんですか。治るって、あるんですか。

オザキ　焦るお気持ちは分かります。自分の性格を変えるのは難しいですが、いつか、色々なことと、うまく折り合いがつけられるようになる日が必ず……

女性　先生、わたし何も考えられないんです。意識がはっきりしてることって殆どないんです。三行以上の文章は読めないし、三分以上同じことに集中できないんです。脳みそ、溶けちゃってるんです。そんなんで、どうやって折り合いつけるんですか。考え方、変えられるんですか。わたし馬鹿なんです。わたし、馬鹿なんですよ。ねえ、先生、こうやってずっと薬飲んでれば、わたし治りますか。馬鹿治りますか。

オザキ　田中さん、田中さんは真面目な方で、自分に対するハードルが、少し、高過ぎるんです。

女性　そうですか？　わたしは人並みにやっていきたいだけですよ。ちゃんと朝起きて、昼働いて、夜は眠りたいんです。それだけです。それがハードル高いって……

オザキ　ハードル、高いんじゃないでしょうか。多くの人が、それを毎日続けることができなくて、ここにいらしているんですよ。

女性　……。

オザキ　じゃあ、また二週間後に。

女性　失礼します。

女性が診察室から出てくる。

まひろ　前の患者さんが、診察室から出てくる。お姉さんは、涙ぐんでいる。……陳腐だな、と思う。わたしたちは目を合わせない。

オザキ　水倉さん。

まひろ　先生がわたしの名前を呼ぶ。わたしは扉に手をかける。診察室に入る時の気分は、職員室に入る時の気分と、少し似ている。わたしが椅子に座ると、先生は「最近、調子はどうですか」と聞く。わたしは「大丈夫です」と答える。先生は「何か辛い気分になることはありますか」と聞く。わたしは「大丈夫です」と答える。先生は「ちゃんと眠れていますか」と聞く。わたしは「大丈夫です」と答える。それを何度か繰り返すと、先生は何かを諦めて、自分の話を始める。そうなると先生はもう、わたしのことを、見てはいない。もしかしたら、先生は、この部屋の外にいる誰かに、扉越しに話しかけているのかもしれない。診察の最後には、いつもなぜか必ず、血圧を計ることになってる。血圧から、わたしの何が分かるっていうんだろう。

オザキ　９０の４５。ちょっと低めですね。

まひろ　はい。

オザキ　お薬、またちょっとだけ量増やしましょうか。

まひろ　はい。
オザキ　悪くなっているわけではないですよ。波があるのは当たり前なので、心配しないでくださいね。
まひろ　はい。

間。

オザキ　じゃあ、また二週間後に。ご予約はいつも通り、受付でお願いします。
まひろ　はい。ありがとうございました。

まひろが診察室を出ていく。オザキの溜息。サナが診察室に入ってくる。

サナ　先生、お疲れ様ス―。コーヒー煎れたけど飲みます？
オザキ　ああ、うん、頂こうかなあ。

オザキがコーヒーを一口啜る。

オザキ　まずっ。
サナ　これ、ブレンドコーヒーなんですよぉ。
オザキ　何と何のブレンド……？
サナ　ネスカフェと、リプトン。さっき、マグカップに紅茶のパック入れて、お湯注いで、妙に色出るの早いなーなんて思ってたら、間違えてコーヒー注いでたんですよぉ。（笑）
オザキ　何でそれを人に飲ませるの？

オザキが窓の外を見る。

オザキ　今日は、天気がいいよなあ。時刻は、午前十時過ぎ。昼の休憩の時間まで、三時間を切った。

6

午前十一時半、高校。校庭。

強い陽射し。うめは眩しそうに、顔の前に手をかざしている。

うめ　今日は本当に天気がよくて、四時間目は、体育。でも、わたしは見学。わたしも、みんなと一緒に走りたいなあ。天気がよくて、校庭を駆け回るみんなは、なんだか、気持ちよさそう。じっとしていても、暑いくらいな、十一時半。１０００メートルのランニングが終わって、みんな、汗をかいている。男子も女子も。わたしだけが、汗をかいていない。わたしは、みんなみたいに走ることができない。わたしは、わたしの右足には、親指がないから、わたしの右足の親指が地面を踏みしめることは、もう二度とない。

校庭の喧騒。

すぐ近くの道を走る自転車の音。

幽かに聴こえる赤ん坊の声。誰かがベビーカーを押して歩いているのだろうか。

道路を行き交う、大小様々な車の音。

先程から、「左へ曲がります、ご注意ください」という、

ボイスアラームの音がうめの耳に纏わりつくように、聞え続けている。

うめは、体育の授業を眺めながら、「あの日」を思い出している。

うめ　あの日も天気がよかった。よく晴れていて、風が気持ちよかった。あの日、わたしは、自転車に乗っていた。あの日、わたしは、信号が変るのを待っていた。そこに、オートバイが走ってきて、そこに、オートバイが左折してきて、そこに、オートバイが衝突してきて、その後のことは、あんまり、ほとんど、覚えていないんだけど、その事故で、わたしの右足の親指の末節骨（まっせつこつ）の長さの半分以上は失われてしまって、わたしの右足首は僅かに折れ曲がって元に戻らなくなってしまって、わたしは、これから一生、歩く時には、足底板という、足の矯正のためのインソールを使

わなきゃいけなくなってしまって、もう、以前のようには、泳げなくなってしまって、わたしは、泳げなくなってしまって、わたしは、引退より大分前に、部活をやめることになってしまって、高校最後のインハイ予選に、出られなくなってしまった。……あの時、どうして、オートバイはわたしに向けて突っ込んできたのかな。どうして、わたしの親指は、どこかに失われて、どこに、消えてしまったんだろう。天気がよかったなあ、あの日は、今日みたいに……

同時刻、高校を早退するけい。

けい　正午前、僕は、高校を早退している。こんな暑い日に１０００メートルも、走ってられっかよ。ぐるぐるぐるぐる同じとこ回って、馬鹿じゃねーの。なんでみんな、平気でぐるぐるぐるぐるしてられんだよ、クソ……。

けいはぐるぐると大きな円を描くようにして舞台上を歩いている。

けい　僕の住む団地から歩いて二分のところにまーちゃんの家はあって、まーちゃんの家から歩いて五分のところには、運河が流れている。そういえば、あれは、高一の頃だったかなあ。まーちゃんと二人で、運河沿いを歩いたことがあったなあ。運河がどこに続いているか、確かめるために。

同時刻、まひろ。

まひろ　尾崎クリニックから帰ってきて、毛布に包まっている、正午前。うちの家から歩いて五分のところには、運河が流れていて、尾崎クリニックはその運河を渡った向こう側にある。わたしにとって、運河のこっち側とあっち側は、最近、とてつもなく、隔たっている気がするなあ。運河、といえば、そうそう、あれは、高一の頃。幼馴染のけいくんと二人で運河沿いを歩いたことがあった。わたしが、「運河ってどこに続いてると思う？」って聞いたら、

けい　海じゃないの。

まひろ　ってけいくんは言って、

けい　確かめてみようか。

まひろ　うん。

まひろが立ち上がる。

高一の頃のあの日。夏。

運河の流れる音。少し離れて、蝉の声。もう少し隔たって、喧騒。

照りつける陽射し。きらきら光る運河の水面。

その光に混じるようにして、クラゲたちは時折、水面に浮び上がってくる。

まひろは運河を眺めながら、

まひろ　あ、クラゲだ。

けい　ほんとだ。運河ってクラゲとか、泳いでるんだなあ。

まひろ　ね。やっぱけいくんの言う通り、海に繋がってるんだよ、運河って……。

けい　そうだね。クラゲって海の生き物のイメージだし。

まひろ　わたし昔からクラゲ好きなんだよね。

けい　え、そうだっけ。

まひろ　うん。ていうか、今うちクラゲ飼ってるし。

けい　あー、思い出した。春から飼い始めたんだっけ。かわいい？　クラゲって。

まひろ　うん。泳ぎ方とかさー、本当かわいい。

けい　え、泳いでんの、クラゲ。浮んでるだけじゃなくて。

まひろ　クラゲはねー、こう、傘が収縮すると、傘の中にあった水が外に押し出されて、その反動で口と反対の方向に進めるんだって。だから一応、泳げないわけではないんだけど、マグロとかみたいに、水の流れに逆らって泳ぎ続けるほどの力はなくて、だから、クラゲは、プランクトンの一種なんだよ。

けい　え、プランクトン？

まひろ　プランクトンっていうのは動物の名前じゃなくて、〈浮遊生活を送っているもの〉っていう意味だから、泳ぐ力が弱くて、流れに逆らえずに水の中を漂っている生き物は、どんな大きさでも、みんな、プランクトンなんだよ。逆に、マグロとかみたいに、流れに逆らって泳げる生き物は、まとめてネクトンって呼ぶのね。プランクトンとネクトンの区別って微妙で、子どもの頃はプランクトンで、大人になるとネクトンになる魚って結構多いんだよ。例えば、マグロとかも、稚魚の頃は泳ぐ力が弱いからプランクトンで、大人になると流れに逆らって泳げるネクトンになるのね。でもクラゲは、クラゲの赤ちゃんはプラヌラっていうんだけど、プラヌラは、プランクトンとして生まれて、大人になってもずっと、プランクトンのままなのね。一生、自分の力だけで泳げるようにはならないの。だから、水槽とかで飼う時には、人工的に水流を作っとかないと、底に沈んじゃうらしくて。沈みかけると泳いで浮き上がってくるけど、沈んで浮いてを繰り返しながら、段々弱っちゃって、死んじゃうみたい。

けい　……そうなんだ。

まひろ　だからちょっと、わたしたちみたいだよね。

けい　え、どこが。

まひろ　流れに乗れないと死んじゃうから。

間。運河を、クラゲが流されて行く。

まひろ　ごめん、つまんないよね。

けい　いや……。

間。

けい　高校慣れた？

まひろ　そこそこ。けいくんは？

けい　うーん、部活入るタイミング逃したかも。そういえばまーちゃん、大会お疲れ。

まひろ　あ、うん。応援来てくれてありがとうね。

けい　いや、まあ、俺は、見てただけだから。まーちゃん、あんなに速く泳げるんだって、びっくりしたよ。

まひろ　ありがと。

間。まひろが進行方向を指差す。

まひろ　このまま行けば海に着くと思う？

けい　まあ、いつかは着くんじゃない？

まひろ　……あのさ、

けい　何？

まひろ　海よりも、向こうまで行かない？

けい　……海より向こうって何があるの？

まひろ　パラオ。

けいは笑おうとする。まひろは笑わない。

水面に、クラゲが浮かんで来る。

まひろ　テレビでやってたんだけど、ここからずっとずっと南の方、パラオ共和国に、ジェリーフィッシュレイクっていう、クラゲの楽園があって。その湖ではクラゲの大群が、一年中、のんびり群れて泳いでいて。なんでそんなにクラゲが繁殖できたのかっていうと、その湖が地形的に海と隔てられてて、魚とか、外敵からの侵略がなかったからで。しかも、その湖に住んでるタコクラゲたちは、光合成でエネルギーを賄うことができるから、熱帯の日差しをいっぱいに浴びながら、湖の中で、繁栄できたんだって。けいくん。わたしたち、いつか、そういう場所に、行くことができると思う？

けい　……。

まひろ　だよね。

クラゲがゆっくりと沈んで行き、見えなくなる。

まひろ　楽園なんてないよね。どこにも。

「あの日」が遠くなって行く。

まひろ　だから、わたしは、わたしたちは、毎日、毎朝、飛び込み台の上に立って。

まひろがプールに飛び込む。

プール。ホイッスルの音が響き続ける中、泳ぎ続ける水泳部員たち。

まひろ　ピーッと笛の音がして、プールに飛び込む度に、わたしはわたしから遠くなった。遠くなったわたしは、五〇メートルのプールを、前の人の足の裏を追いかけるようにして泳ぎだす。目の前で、柔らかそうに膨らんだふくらはぎがしなやかに動き、わたしの視界を遮りながら遠くへ行く。ピーッとまた笛が鳴り、誰かがわたしの背後に飛び込んでくる。追いつかれないように必死で泳ぐわたしのバタ足は、醜い。コーチが、水倉、お前、上から見てると溺れてるように見えるぞ、と言って笑う。そうなんです、わたし、溺れてるんです、と言ったら、もっと笑われた。流れに乗れないんです、と言ったら、プールに流れなんてない、とコーチは言った。ほら、もういいから、コースに戻りなさい。ピーッと笛が鳴る。わたしは再び水中に投げ出される。脚をバタつかせて、腕を漕いで、五〇メートル、折り返して百メートル、もう一度折り返して……そうやってぐるぐるぐるぐる泳ぎ続ける。コーチ、あなたには見えないんですか。このぐるぐるが、こんなにも強大な、何もかもを吸い込むような流れを生み出している様子が、見えないんですか。コーチ、わたしたちはどうして、こんな風に、ぐるぐる泳ぎ続けなきゃいけないんですか。わたしたちは生きている限り、このぐるぐるから逃れられないんですか。コーチ、わたしたちはいつか、マグロみたいにずっと泳ぎ続けていられるようになって、このぐるぐるに乗っていることが、普通になって、こんなことは、考えずにいられるようになりますか。それって、いつになったら、そうなれるんでしょうか。コーチ、わたしたちは、ちゃんと全員、自力で泳げるネクトンになるんですか。わたしたちのうちの何人かは、プラヌラなんじゃないんですか。コーチ、わたし止まりたいんです。もう、泳ぎ続けるのがしんどいんです。泳ぐのをやめたら、沈んでしまうでしょうか。沈んだら、戻ってこられなくなるでしょうか。もう、泳ぎたくないんです。わたしは、泳ぎたくないんです。――そして、わたしは、五〇メートルの水槽の底に沈んでいく。飛び込み台の上から、誰かがわたしを眺めている。あれは、わたしだ。わたしは泡みたいにぷくぷくぷくぷく膨らんで、ぱちんと消えた。

水底。舞台にまひろただ一人を残して、人々が去っていく中、溶暗。

7

溶明。

喫茶店の午後。はんなとこうすけが板付き。

はんな　昼下がり、カフェは、ラッシュの時間帯である。

オザキとサナが来店。

はんな　いらっしゃいませー、お先にお席の確認お願い致します。――ね、こうすけさ、もうすぐ、一時で上がりでしょ。ゴミ捨ててきてよ。豆カスすっごい溜まっちゃってるからさ。

こうすけ　えー、超重たそうじゃん……。

はんな　ヘルプの人にはゴミ捨て頼めないんだもん。ね、お願い。あ、ビニール二重にするの忘れないでね。

こうすけ　はいはい。

こうすけがゴミを捨てに行く。オザキがカウンターにやって来て、

はんな　いらっしゃいませー。

オザキ　あ、ブレンド二つ。

はんな　ブレンドお二つですね。店内のご利用でよろしいでしょうか。
オザキ　はい。
はんな　砂糖とミルクはお一つずつで宜しいでしょうか。
オザキ　あ、要りません。両方とも。
はんな　（裏に向かって）ツー・ブレンドお願いしまーす。少々お待ちくださいませー。
　ドリンク担当の店員がコーヒーを用意し、舞台裏から腕だけで差し出してくる。
　はんなは、そのコーヒーを受け取り、トレーに乗せて、
はんな　お待たせ致しましたー。
オザキ　ありがとう。
はんな　ありがとうございます。ごゆっくりどうぞー。
　オザキがコーヒーだけを持ってサナの待つ席に戻る。
　こうすけがゴミ捨てを終えて戻ってくる。
こうすけ　あー、重かった。
はんな　お疲れお疲れ。
こうすけ　じゃ、お先に失礼しまーす。あ、シフト出たらさ、はんなの分も写メしてラインに送っとくよ。
はんな　あ、助かるー。お疲れ。
　こうすけが退場。
オザキ　はい、サナちゃん。
サナ　あ、ありがとうございます。
オザキ　あのね、これが本物のブレンドコーヒーだからね。さっきの君のやつは、何ていうか、キメラコーヒーだから。
　コーヒーと紅茶のキメラ……聞いてる？
サナ　いえ～い。
オザキ　何だコイツ……。
　間。
サナ　最近、友だちが、心療内科に通い始めたらしいんですよぉ。
オザキ　へー。
サナ　カウンセリングとか受けてるらしくて。「うち来れば？」って言ったら、「それはちょっと」って言われちゃったんですけど。
オザキ　まあ、それは、そういうもんでしょ。
サナ　でも、先生、カウンセリングって、必要なのは「話す力」じゃなくて「聞く力」で、治すものじゃなくて、治るものなんでしょ。
オザキ　ま、原則はね。
サナ　だったら話を聞く相手って、わたしでもいいくらいじゃないんですか。
オザキ　でも君は、友だちが相手だと、同情するでしょ。
サナ　そりゃしますよ。友だちだし。
オザキ　同情されることが分かっていて、同情されるような話をすることができない人もいるからね。
　間。
サナ　その友だち、事務の仕事をしてるんですけど。電話が鳴る度に、胸がどきどきして、指の震えが止まらなくなるんだって言ってました。そういう状態が、もう一年以上続いてたって。
オザキ　うん。

サナ　わたし、その子がそんなに思い悩んでいたこと、全然気が付かなかったんですよね、つい最近まで。ツイッターも、インスタも、ちょっと投稿少ないかな、くらいでいつも通りだったし……。友だちなのに、肝心なときに全然力になれなくて、情けないです。こういうの、普通なんですかね……。

サナが俯いて、鼻を二回啜り、ブレンドコーヒーを一口啜る。

同時刻、カウンター。

はんな　こうすけが帰り、他店から来たヘルプの女の子と力を合わせて、猛然とコーヒーを提供し続ける、わたしの時給は９０７円、プラス、役職手当２０円。東京都の最低賃金を一円単位で刻んでくる、この店のスタンス、クソとしか言いようがねぇな。今日のバイトが終わるまで、あと一時間半くらい。はぁ……。――いらっしゃ……けいくん！　高校は？

けい　サボりっす。

はんな　大丈夫かい、受験生……。

けい　この後ちゃんと予備校には行くんで。まひろ、元気ですか。

はんな　んー、どうだろうなあ。今は、定期的に近くの心療内科通ってて、そこの先生、結構ちゃんとした人で、まあ、信頼できる感じらしい。わたしは会ったことはないんだけどね。

けい　そうですか。あ、カフェモカ。

はんな　はーい。あ、代金いーよ。

けい　いや悪いっスよ。

はんな　いーっていーって。今お店、店長居ないからサービス。内緒にしてね。

けい　どもっす。忙しそうですね。

はんな　まあ、この時間帯はね。ちょっと待ってて。モカお願いしまー……

ドリンク担当の店員が舞台裏からカフェモカを差し出してくる。

はんな　早ッ、ヘルプさん、有能過ぎ……。はい、お待たせしましたー。あ、そういえば、今日、夜から雨らしいね。けいくん傘持ってる？

けい　え、持ってないっす。

はんな　え、本当？　あ、じゃあビニール傘貸すよ。お客さんの忘れ物だけど。

けい　いいんスか、それ。

はんな　いーのいーの、大分前のやつだし、ビニ傘わざわざ取りに来る人なんていないでしょ。ちょっと待ってて。

はんなが一度退場し、ビニール傘を持って戻ってくる。

はんな　はい。じゃ、予備校頑張ってね。

けい　どうも……。

オザキとサナが席を立って、

オザキ　そろそろ戻ろうか。

サナ　はい。

けいが空いた座席に座る。

けい　はんなさんは、まーちゃんの、四つ年上の、お姉さんである。はんなさんは、駅の向こう側にあるカフェで、バイトをしている。僕たちが高校生になったとき、はんなさんは、もう、大学生だった。大学生になってからのはんなさんは、何だかなあ、僕らとは、別の生き物になってしまったような気がする。高校生が水中に生きているとすれば、大学生は、陸の生き物で、彼らには、僕たちの感じている、息苦しさはなくて……

けいが机に向かって眠る。

少し時間が経過して、高校。

ゆり　けい、早退だってね。
うめ　どうせサボリでしょ。
らこ　だよねー。
もじみ　でもあいつ成績はいいからなあ。
ゆり　ねー。
うめ　地頭（じあたま）いいんでしょ。
らこ　何、地頭って。
うめ　勉強が出来るってことじゃなくて、根本的な頭の良さっていうか。
ゆり　へー。
らこ　あー、そういえばまひろの話についてけるの、けいだけだったよね。まひろって時々、よく分かんないこと言ってたけど、けいだけは何か、分かってたよね、なぜか。
もじみ　付き合ってたんじゃないの？　あの二人。
らこ　あー、そうかも。
もじみ　ていうか、今日も、やっぱ、来なかったな、まひろ。
ゆり　だねー。

もじみがふと窓の外を見る。窓の外には、誰もいない校庭のグラウンド。

もじみ　帰ろっか。

チャイムが鳴る。らこ、ゆり、もじみが下校していく。

夕暮れの教室に、うめがただ一人残される。

うめは教室の机をかき集め、その上に眠る。

8

過去。

去年の十二月、うめの病室。夕暮れ時。うめはベッドの上に横たわっている。

看護婦　白土うめさん。
うめ　はい。
看護婦　そろそろ退院ですね。年末はご自宅で過ごせますよ。やっぱり若いと回復が早いですよね。
うめ　はい。

まひろが病室に入って来て、

まひろ　うめ。
看護婦　お友達？
まひろ　あ、はい。
看護婦　ごゆっくりどうぞ。

看護婦が病室を去る。

うめ　まひろ。来てくれてありがとう。
まひろ　あ、これ、千羽鶴……。
うめ　うわ、ベタだなあ。ていうか、わたしそろそろ退院なんだけど。
まひろ　まあ、もらってやってよ。らことかが色んな人に声かけてさ、ちょっと余計に鶴、折れちゃってるくらいなんだよね。

うめ　じゃあそれ千羽じゃないんじゃん。
まひろ　だね。アハハ……。足、痛む？
うめ　まあ、もう、そんなに。断端形成術（だんたんけいせいじゅつ）とかいう手術してさ、ちぎれた指の先っちょを丸める手術なんだけど、手術、うまくいったみたいだから、一ヶ月くらいすれば、普通に感覚とかも戻ってくるんだって。骨折の方はまだ治るの時間かかりそうだけど、もうあんま痛くないし。
まひろ　そっか。
うめ　つまり、その、大丈夫、だから。
まひろ　うん。
うめ　だから、大丈夫だよ、わたしは……。
まひろ　うん。
　　間。
うめ　水泳部のみんなは、元気？
まひろ　ああ、うん、元気、だと思う。
うめ　何それ、煮え切らないなあ。
まひろ　あの、うん、あのさ、わたし、水泳部辞めたから。
うめ　え？
まひろ　だから、水泳部、辞めたから、わたし……。
うめ　え、なんで？
まひろ　うん……。
うめ　うんじゃなくて、なんで？　もしかしてさ、わたしに気とか遣ってる？
まひろ　いや、そうじゃなくて。わたしが、わたしで、辞めようと思って……。
うめ　え、なんで？
まひろ　それは、特に、理由がってわけじゃないんだけど……。
うめ　何それ……。
まひろ　ごめん。
うめ　ごめんって何？　ねえ、なんで水泳部辞めたの？
まひろ　だから、理由は、はっきりとはなくて……。
うめ　え、それって、何か、すっ……ごく、贅沢だよね。だって、わたしはもう、泳ぎたくても泳げないのに、まひろは、泳げなくなったわけでもないのに、なんで部活辞めんの？
まひろ　だから理由は、自分でも、よく分かんなくて……。
うめ　それが、贅沢だって言ってんの、分かんない？　……分かんないか。だってまひろは、足の指無くなってないもんね。足首折れたり、曲がったりしてないもんね。まひろ、わざわざお見舞い来てくれたのはありがたいけどさ、全然わたしのこと考えてない。何か、やっぱ、結局、他人事だよね。
まひろ　ごめん。
うめ　謝んないでよ。ていうか、自分のこと悪いって思ってないよね？　だって別に、水泳部辞めるとか辞めないとか、まひろの自由だよ。何も悪いことしてないのに、なんですぐ謝んの？　そうやって謝るのは、わたしが何か怒ってて、わたしが交通事故に遭ったかわいそうな同級生で、わたしとの今のこういう時間を適当にやり過ごしたいからでしょ。なんも考えずに、思考停止でとりあえず謝ってみてるだけだよね。ちがう？
まひろ　ごめん。

うめ　だから謝んないでって。ていうか謝るってことは、ちがわないんだ？　まひろとわたしの関係って、そういう、上辺な感じの対応しかしてもらえない程度のだったんだね。そんな人友だちじゃなくていいよ、もう。何なの、本当。何となくで部活辞めて、何となくで謝って、そのまま一生、何となくで生きてけばいいよ、まひろは。でも、それって楽しい？　それって、生きてる意味、ある？

まひろ　ごめん。分かんない。

うめ　分かんないじゃなくて、考えてよ。ていうか、泳がないんならその脚わたしに頂戴。贅沢だよ、まひろ。

まひろ　分かんない。ごめん、分かんないよ。泳ぎ続けたいと思えないことって、おかしいかなあ。泳げる身体があるのに、そう思えないって、贅沢かなあ。わたし、もっと意味のあることをしなきゃ、駄目かなあ。わたし、わたしだって、代われるもんだったら、この体、うめに、あげたい。うめに、この体、有効に、使ってもらいたい。でも、それは、できないじゃんか。わたしたちは、誰かと、代わったり、誰かに、代わってもらったり、できないじゃん。それって、どうしたらいいの。どうする、べきなの。分かんないよ。わたしは、わたしの、この自由さを、どうすればいいのか、分かんないよ。自由なのに、息苦しいよ。毎日……

うめの記憶の中でまひろが去って行く。

うめ　あの日、わたしは、まひろに、あんなことを言いたかったわけではなくて、あんなことを言わせたかったわけではなくて、わたしが言いたかったのは、ただ、わたしは、わたしがもう前みたいに泳げないってことが、すごく、悲しいっていう、部活を途中で辞めなきゃいけないことが、すごく、悔しいっていう、それだけのことだったのに。それだけのことだったのに……。わたしは、まひろに、それを、押し付けるべきじゃなかったのに……。わたしは、まひろに、あんなことを言うべきではなかったのに……。でも、そのことを謝る機会はもう、失われてしまって、わたしが退院して高校に戻った時、まひろはもう、高校に来なくなってしまっていて。――どうして、わたしたちは、持っていたり、持っていなかったり、奪われたり、奪われなかったりするんだろう、なぁ。分かんないなぁ……。でも、それでもわたしは、わたしたちは、失ったまま、続けていかなきゃいけない。わたしの言葉がまひろに届く日は、いつかまた、来るだろうか。

9

はんながスマホを見ている。

はんな　はい、あ、はい、××大学の水倉です……はい、はい、先日は貴重なお時間を割いてご面談頂き……はい、はい、あ、ありがとうございます。あ、はい、今……大丈夫です……はい、あ、はい、是非、次の選考にも進ませて頂きたいと……はい、一日の十時……一日の水曜日ですね。はい、大丈夫です。はい、分かりました、はい、どうぞよろしくお願い致します……はい、はい、ご連絡ありがとうございました。失礼いたします。

電話を切った瞬間、はんなの顔から表情が抜け落ちる。

はんなが家に帰ってきて、

はんな　ただいま。まひろ、居ないの？

はんながリビングを見回すが、まひろの姿はない。

はんなは一人、空っぽの水槽を眺める。

はんな　クラゲが死んだのは、わたしのせいだった。わたしが間違えて水槽内のポンプの電源を切ってしまったせいで、まひろが大事に飼っていたクラゲは半年で死んでしまった。わたしが謝ると、まひろは「いいよ」と言った。「元々、ペットのクラゲの寿命は、半年くらいらしいから、お姉ちゃんのせいじゃないよ」と言って、とろとろになったクラゲをビニール袋に入れて、近所の運河に持っていって、流した。それで、沈んでいくクラゲの死体を見ながら、まひろは唐突に、「海に行きたい」と言った。いつもとちがって、とてもはっきりした声で、宣言するように言ったから、わたしはびっくりした。「海？」と聞き返すと、「海は、どこかに繋がってるじゃんか」とまひろは言った。そして、「わたし

の今は、どこにも繋がってない」と言った。吐き出すように言った。その時、わたしはまひろに何も言ってあげられなかったから、まひろの言葉は、クラゲと一緒に運河の底に沈んでいった。秋の日のことだった。

雨が降り始める。

予備校。

けい　予備校の自習室で、僕の右隣りの席に座った学ランのやつは、さっきからずっと、斜め前の席の女子を見ながら、ソワソワしている、なー。と思ったら、急に、ノートを破って、電話番号とラインのIDを書き始めた。そして、不自然な感じで席を立って、女子の机にそのメモを置きに行った。ばっ……かじゃねーの。女子は、メモをちらっと確認してから、ペンケースの中にしまった。みんな、勝手に色々よろしくやってるよな。何か、やってらんねーよ、って、自習室を出る、夜の八時。

同時刻、尾崎クリニック。

オザキ　はーい、じゃ、今日もお疲れさまでした。

サナ　お疲れ様です。

オザキ　やっぱ段々忙しくなってきてるねえ。新五月病。六月病……。

サナ　はい。……あの、先生。

オザキ　何、サナちゃん。

サナ　わたしたちと、彼らって、何か、ちがうんですかね。境界とか、あるんですかね。わたしが、何も、友だちに、何も話してもらえなかったのは、わたしが決定的に、ちがうから、分かってないから、なんですかね……。

みんなが、家に帰って行く。

10

雨が降っている。

運河は少し、水の勢いが増しているようだ。

けいはビニール傘を差しながら、運河沿いを歩いている。

けい　降り出した雨が、運河の水面をバシャバシャと叩いていた。いつも、僕たちが気づかないうちに、海の水や川の水、地球上のありとあらゆる水は、少しずつ蒸発して水蒸気になっていて、蒸発した水蒸気は空にのぼって雲になって、雲の中で小さい水の粒がくっつきあって大きくなって、雨になる。だから、今降っているこの雨も、運河に注ぎ込まれた後は海に流れて行って、それがまた蒸発して雲になって……

同時刻、運河を挟んだ向こう側。

まひろ　海に行きたい。でも、今、わたしが歩いて行ける限界は、近所の運河くらいだった。外は、雨が降っていた。わたしは傘を差さなかった。雨が、運河の水面をバシャバシャと叩いていた。わたしは運河の水面をじっと見つめていた。水面は暗くて、クラゲの姿は見えない。わたしはただ、立ち尽くしている。運河を挟んだ向こう側に、誰かが立っている、気がする。

同時刻、けい。

けい　運河を挟んだ向こう側に、誰かが立っている、あれは……。

けいが運河を挟んだ向こう側に呼びかける。

けい　まーちゃーん？　おーい、まーちゃーん。おーい。

同時刻、まひろ。

まひろ　運河を挟んだ向こう側から、誰かが、わたしの名前を呼んでいる。向こう側に、立っているのは……、――けいくん。

けい　まーちゃーん。まーちゃんだよねー？

まひろ　うーん。
けい　何してんのー？
まひろ　散歩ー。
けい　あれー、傘差してなくなーい？
まひろ　うーん、差してなーい。
けい　なんでー？
まひろ　まあ、いいじゃーん。
けい　えー？　風邪ひくよー。俺、傘持ってるから、今からそっち行こうかー？
まひろ　いいよいいよー、大丈夫ー。
けい　えー？　ていうか、まーちゃん、元気してたー？
まひろ　うーん。みんなはー？
けい　俺たちは元気だよー。みんな元気だよー。
まひろ　そっかそっかー。
けい　うーん。まーちゃんはー？
まひろ　大丈夫だよー。
けい　元気ー？

間。

けい　まーちゃん、元気ー？
まひろ　……だめ、かもー。
けい　えー？
まひろ　わたし、もう、だめ、かもー。
けい　なんでー？
まひろ　何だか、もうこのまま、どこにも行けない気がするんだー。だからもう、わたしのことは、忘れて、いいよー。思い出さなくて、いいよー。置いていって、いいんだよー、って、みんなにも、うめ、にも、伝えてもらって、いいかなあー。
けい　えー？
まひろ　あのねー、誰のせいでも、ないよー。誰かのせいじゃ、ないよー。でも、もう、だめなんだ。それは、特に、理由がってわけじゃないんだけど。はっきり言えない理由って、贅沢かなあ。苦しいって言う権利、ないかなあ。わたし、だめなんだ、本当……。
けい　なんだよそれ、だめじゃねえよ。まーちゃんは、なんもだめじゃねえよ。今からそっち行くからさー、ちょっと待っててよー。
まひろ　ねえ、みんな元気ー？
けい　元気だよー。俺らは、みんな元気だよー。今そっち行くからさー、ちょうと待っててよー。
まひろ　ずっと、元気でいてね。ずっと、元気でいてねー。
けい　みんな待ってるよー。まーちゃんが戻ってくるの、待ってるよー。そっち行くからさー。待っててよー。
まひろ　けいくーん。
けい　なにー？
まひろ　暗くて、水面が真っ暗で、これじゃ、クラゲが浮いてるか、沈んでるか、分からない、見えない、ねー。
けい　まーちゃーん、今から行くからさー、待っててよー。
まひろ　暗いところで沈んでいくクラゲは、見えないところに沈んでいるクラゲは、やっぱり、やっぱり、死んでしま

うんだろうか。

けい　　まーちゃーん。

まひろ　　死んでしまうんだろうか。流れに乗ることにも、抗うことにも、疲れてしまって、まっすぐに落ちて、淀んだ、流れも、光も届かない水の底に、沈んでいく。

けい　　行かないでよー。

まひろ　　ここは、水の中。わたしの息は、いつまで持つだろう。流れに逆らえずに、水中を漂っている、プランクトンの、子ども、わたしだけが、プラヌラなんだろうか。みんなはいつか、今を乗り越えて、自分の力で泳いでいける、ネクトンになるんだろうか。

けい　　どっか行かないでよ、まーちゃーん。——と、いう、僕の声は、水の流れに押し流されて、どうしようもなく、届いている、という実感がなくて、僕たちの間には、水が流れて、どうしようもなく、水が流れて……、——ここにいてよー。まーちゃーん。帰ろうよー。

まひろ　　みんなが、柔らかそうに膨らんだふくらはぎをしなやかに動かして、ぐるぐるぐるぐる泳ぎ続けて、いる。そのぐるぐるが、巨大な流れを生み出して、いる。わたしたちは、この先がどうなっているか分からないのに、今いる此処が、どこにどう繋がって行くのか、本当にどこかに繋がって行くのか分からないのに、ぐるぐるぐるぐる泳ぎ続けている。生きるっていうのは、そういうことなんだろうか。どこに続いているのかも分からない水の中を、無我夢中で泳ぎ続けるのが、生きるってことなんだろうか。わたしの、苦しいって気持ち、今感じてるこの苦しさは、流れに乗ることができたら、泡みたいに消えて無くなるんだろうか。大人になったら、何も考えず泳ぎ続けることができるようになるんだろうか。わたしは、泳ぐのをやめてしまったわたしは、こうやって、ずっとこのまま、水の底に沈んで、わたしは、ずっと此処、ずっと此処なんだろうか。

けい　　水、が、——水が、何もかもを押し流して、僕とまーちゃんの間を、どうしようもなく、隔てて、——僕は、思い出す。高一の夏、水泳部の大会を見に行った日のこと。

——大会の日。プール。

水泳部員　いっけーいけいけいけいけまひろ、おっせーおせおせおせおせまひろ！　いーけ、おーせ、まひろファイッ！！

けい　　まーちゃんは、一心不乱、という感じで泳ぎ続けていて、そのまーちゃんに、水泳部のやつらは、声をかけ続けていて、水の中にいるまーちゃんには、声援なんて聞こえてないって、分かってるだろうに、声を出し続けていて、

水泳部員　いっけーいけいけいけいけまひろ、おっせーおせおせおせおせまひろ！　いーけ、おーせ、まひろファイッ！！

けい　　水の中にいる人には、声援なんて聞こえるはずないのに、彼らは、声をかけ続けていて、声がガラガラになるほど、叫んでいて、あんなん、応援する側の自己満足だって、僕は思ったりしたけど、

水泳部員　いっけーいけいけいけいけまひろ、おっせーおせおせおせおせまひろ！　いーけ、おーせ、まひろファイッ！！

けい　　でも、本当は、僕だって、まーちゃんを応援したかったのだ。僕は、あの日、まーちゃん頑張れーって、まーちゃん負けるなーって、声に出して、応援するべきだったのだ。例えそれが、まーちゃんには聞こえなかったとしても、まーちゃんを助けるのは、結局、まーちゃん自身の頑張りでしか、なかったとしても、それでも僕は、まーちゃん頑張れーって、言うべきだったし、言いたかったのだ。届かないって分かっていても、まーちゃん頑張れーって、まーちゃん負けるなーって、何度でも……

水泳部員　そーれ！　そーれ！　ラストラストラストラスト！　ラストラストラストラスト……

——水泳部員の声がどんどん遠くなっていって、

現在。夜。運河。

けい　まーちゃーーん！

まひろ　……。

けい　まーちゃーーん！　聞こえるーー？

まひろ　……。

けい　まーちゃーーん！　聞こえるーー？

まひろ　……。

けい　まーちゃーーん！　聞こえるーー？

まひろ　……なにー？

けい　まーちゃーーん！　聞こえるーーー？

まひろ　けいくーーん、なにー？

けい　まーちゃーーーん！　聞こえるーー？　聞こえるーーー？

まひろ　聞える、よー。

けい　まーちゃーーーん！

まひろ　聞えてる、よーー。

けい　まーちゃーーん、大丈夫だよー、僕たちは、大丈夫、だよー、僕たちは、生きられるよー、僕たちは、どこにだって行けるんだ、水の中でも、外でも、本当は、生きられるんだ、ずっと、楽園なんてなくても、生きられるよ、僕たちは、今、僕たちが考えているよりも、きっと、ずっと、大きな、大きな、大きな、大きな、大きな、大きな流れの中に居て、此処は、ほんの一部なんだ、だからいつか、何もかも今日とはちがう明日が、来る、僕たちの今は、そこに、繋がってる、僕たちは、その明日を、生きられるよ、いつか、呼吸が止まるまでは、ずっと、生きられる、だから、今すぐどっか行かなくていいから、帰ろうよー、まーちゃーん、帰ろうよー。今そっち行くからさー、ちょうと待っててよー、まーちゃーーん。まーちゃーーん。

静寂。

まひろ　……えた、よー。

けい　えー？

まひろ　聞えた、よー。

けい　うーん。

まひろ　待ってる、待ってるから、わたし、ここにいるから、

けい　うーん、僕も今そっち行くよー。だから、一緒に、一緒に帰ろうね。

まひろ　うん、帰ろぉー。一緒に、一緒に……

――溶暗。

【了】

【参考文献】

岩間靖典『クラゲーその魅力と飼い方』（誠文堂新光社、二〇〇一年五月）

岡村はた、橋本光政、前田米太郎、室井綽『図解　生物観察事典　新訂版』（地人書館、一九九六年十月）

河合隼雄『カウンセリングと人間性』（創元社、二〇一五年三月）

ジェーフィッシュ『クラゲのふしぎ―海を漂う奇妙な生態―』（技術評論社、二〇〇六年九月）

※上演を希望される場合、営利目的でない上演の場合は無料で許可します。営利目的の上演を行う場合は下記の連絡先までご連絡ください。（taka_sawa_ko@yahoo.co.jp）